知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【開催日時】平成２５年８月７日（水）
１３時３０分～１５時３０分
【会　　場】伊豆市役所土肥支所　４階　集会室

１　出席者

・　発言者　　沼津市戸田地区、伊豆市土肥地区において様々な分野で活躍されている方
５名（男性３名、女性２名）

・　傍聴者　84 人

２　発言意見

	項　　目	頁
発言者１	NPO 法人の活動報告と、ロシアとの交友状況の展望	5
２	戸田地区の危機対策 富士山世界遺産センターの建設と、県道整備の要望 戸田地区の高齢化対策	7
３	旅館組合が運営する商業施設の活動報告と今後の展望・課題	14
４	地域活動を通した郷土愛の育成	17
５	田方地区消防団の課題 椎茸産業と山間部の食害被害	23
傍聴者１	国道 136 号線土肥バイパスの進捗状況 土肥山川の土砂体積	29
２	戸田地区の火葬場問題 燃料価格の高騰	31
３	恋人岬の一社一村運動についてのお礼	33

＜知事挨拶＞

戸田地区、土肥地区の皆様、お暑い中、きょうはようこそお越しいただきましてありがとうございます。県知事の川勝平太でございます。

きょうは８月７日ですね。ちょうど１カ月前の７月の４年前に知事になりまして、それ以降、なるべく現場に出かけようというふうに心がけてまいりました。と申しますのも、例えば土肥地区で、港を清水の港と比べると、フェリーの到着する場所が、やや見劣りがするというようなことは書類で見てもわからないでしょう。そこの責任者と一緒に話をするというふうにするとすぐわかります。

通常は仮にそうした問題というか課題があった場合には、例えばあそこで下りるでしょう、そして上がりますね。前はあの国道 136 号線を横切ってバス停に行かなくちゃいけなかった。ですが今は混雑時には下で乗り降りすることができるようになっておりますけれども、大分改善されたんですよ。

こうしたことを決めるのにも、まずはこちらの現場で職員がそのお話を聞いて、そしてまた東部地域政策局に持っていって、それからまた本庁に持ってきて、課長、局長、部長、さらに場合によっては副知事、そうしたところに上げて、これは知事に持っていくべきか、持っていくべきでないかということを取捨選択されて、その上で来ると。そうするとこれ伝言ゲームですから、だんだん、だんだんと元々の現場とはちょっとずれたりするわけですね。私がそれに基づいて判断を下して、下ろしていきますと、時間もかかり、手間もかかり、そしてやっぱりちょっとずれたものに基づいて判断を下しますと、実際の現場の要請とは違ったものになりかねません。

ところがここに下りてきて、そして実際にそこで現場を見て話をしますと、そこについてだれが責任を持って意思決定ができ、どういう予算を講ずれば、どの程度の解決が図れるかということは、その場ですぐに判断できます。あるいは持ち帰って判断しなくちゃならない場合もありますし、県議会の先生に相談しなくちゃいけない場合もありますけれども、その事の判断はその場でできます。すごく早くなるわけです。

そういうことでこれを現場主義というふうに堅苦しい言葉ですけれども、名付けまして、現場に出てお話を聞いて、そしてできる限りそこの場で解決するような、解決の方向性を皆さんと共有してから帰るということで、それやって４年間で 1,202 回、県下の公式のところを回ったんです。

しかし４年目ぐらいになりますと、やはりここあたりは割と簡単に来れますけれども、

例えば賀茂地区の南伊豆だとか、あるいは大井川の北の方の井川だとか、あるいは天竜川の本当に北の方の水窪などというようなところに出かけますと、行って帰るだけでも大変な時間がかかります。

ですからそれをなるべく省こうということで、現場で数日間滞在すると。滞在しているところが知事室だということで、きょうの知事室は修善寺の沼津土木事務所修善寺支所です。きのうの知事室は東部地域政策局の机なんですよ。そのように移動知事室というのを始めまして、去年は５回やりました。それで好評というか、やっぱり１日かけて帰ってくるというよりも、よりいいということで、たまたま２期目当選させていただきましたので、これをやるというふうにしたわけです。

そして７月５日に仕事が始まりました。そのときはちょうど議会の開催中でした。議会の開催中で、議会は知事選のためにちょっとストップしていたわけですけれども、また参院選のためにちょっとストップしていたわけですが、これは南海トラフの巨大地震が襲った場合にどれぐらいの被害が出るかということについて、昨年の８月の末に中央政府の方から、静岡県だけで 11 万人ぐらい、日本全体で 32 万人ぐらいの犠牲者が出るということだったんです。そうおっしゃったまま何もなさらないんです。

そのデータを取り寄せまして、こちらの静岡県下の地勢地形、人口の分布、そうしたところにそのデータを落とし込んで、どれくらいの被害が出るかということについて、ようやく我々の方で調査し終えたのが６月の末でした。調査しながら、どういうふうにしたならば、10 万人もの人たちが犠牲にならなくて済むかということをあわせて考えていたわけです。それを我々は「2013 アクションプログラム」というふうに名付けまして、151 ぐらいのことをすれば、10 年間かければ８割ぐらいの被害を減らせるというそういう試算ができました。

そして、そのためにはお金が要りますけれども、お金はないのです。したがって、これを我々の給料を下げて、きょうは県議会の先生に来ていただいておりますけれども、県議会の先生方の給料も１割全面カットということで、全員カットされて、そのお金を工面して、とりあえずの今すぐできることについては、その予算を組ませてくださいと、それが８月２日に通ったんです。そして議会が終わりまして、ようやく自由の身になったというか、現場に出られるような身になりましたので、選んだのがここです。

そんなことで、一昨日、昨日、今日とこの地区のあちらこちらを回りまして、たまたま今日は西浦の小学校に参りました。そしてこどもたち６年生、10 人余りの少年少女と彼ら

が取り組んでいるさまざまな取り組みを教えていただくと同時に、また防災についてどんなふうなことをしているかも、津波が来たときにどのようなルートで逃げたらいいかというようなことについて、彼らがしっかり勉強しているということを、また訓練しているということもわかりまして、安心した次第です。

それからまた戸田の漁港にも訪ねまして、漁業組合の方たちが農協と組んでお魚も農作物も一緒に買えるような、そういう市をしていらっしゃるということもわかりまして。また戸田のお塩ですね。このお塩が今日本では最もおいしい、あるいは世界で最もおいしいお塩と言われていますが、その小さな工場がこの間の風雨で上からの落石のために壊れて、その方のお話を聞くと同時に、その話も初めて知りましたので現場を見てきて、そしてこちらの方に参ったと、こういうわけです。

ちょっと一言だけ、きょうはたまたま沼津市の副市長さんがいらっしゃっています。私は西浦の少年、その前に内浦にも行っております、今回ではありませんが。内浦と西浦の上に高台があるのは御存じですか。その高台の上に中学校があります。御存じですか。その中学校に、今回ではありませんけれども、前に行きました。全員の子供たちと一緒にお話をしまして、「津波怖い？」「怖い」「どうしたらいい？」「高台に逃げるべきだ」「その高台ってどこだ？」と言ったら、「ここだ」と。その高台の後ろの方はミカン畑になっています。そのミカン畑の真ん中に今 5.3 キロの農道をつくっているんですよ、ど真ん中に。そうすると、それは内陸のフロンティアになるわけです、内浦にとっても、西浦の人にとっても。

そこに移りたいと言っている人たちが、例えば内浦の重須地区にはたくさんいらっしゃいます。しかし自分たちの家を処分してから移れとか、家の代金はどうするかということになります。大問題ですよ、住まいを変えるということは。だからもっと簡単な方法は、そのままにしておくと。仮にもしも下がやられた場合、上に仮設住宅をつくらなくちゃいけないでしょう。道路がそこにあると、すぐ下に自分たちの町があると、そこに仮設住宅をつくれば、そこが安心ですよね。だから私たちは初めからつくったらいいと。

だれがつくったらいいか。公的につくればいい。仮設住宅でなくて、前もってそこに住んでおけば仮設じゃないので、そして仕事場がお魚とか、それに関連したお仕事をしている人が多いですから、仕事は沿岸ですればいい。だから家が２つできる。だけど家が２つあっても、どのようにお金を工面するのか。地代と家賃ぐらいの分だけをお支払いして、それができる人だけ上と下と両方家を持てるわけです。

だから公的なものが管理をして、上は借地借家で、例えば市が持っている、県が持っている、農協が持っている、漁協が一緒に持っていると。そうすると、そんなに不動産にお金をかけないで、上に住んで、下で仕事ができるというふうになって、子供たちがもしお父さんやお母さんが下にいる、おじいちゃんやおばあちゃんが寝ているということであれば、自分たちが高台に逃げなくちゃいけないことを知っているんですけれども、心配で戻ることだってあり得ると。それは皆家族の絆がありますから。ですから、子供たちは向こうにいる、おじいちゃん、おばあちゃんも高台のところにいるから安心だということであればすぐ逃げられますね。そういうふうなことをきょうも西浦の子供たちと話をしながら感じた次第です。

ともあれ豊かなところです。一方で、有事にも備えなくちゃいけないということで、きょうは戸田地区、土肥地区のそれぞれのリーダーの方々から、広聴ですから、しっかり広く御意見を聴くということで、きょうは全員の方々の御意見を聞くことはできませんけれども、その代表の方々の御意見をしっかり承りまして、これを県政に生かしてまいりたいということでございます。何とぞよろしくお願いを申し上げます。（拍手）

＜発言者１＞

ＮＰＯ法人戸田どっとこむの理事長をしております。きょうはよろしくお願いいたします。

私たちの活動は、沼津市との合併を控えた 15 年の２月に発足しました。老婆心というか、合併をしたら戸田の地域はとても市内から取り残されて、行政もなくなってしまうし、どうなるんだろうという勝手な心配をいたしまして、観光的にも活性化していかなければならないという漁業の町であり観光の町でありますので、そういうことを心配をしながら、国の重要文化財になりました松城家の住宅を一番初めに観光化していこう、公開していこうということから活動が始まってきました。

個人の持ち物ですので、とても大変難しい問題がありましたけれども、市との協力もありながら、戸田のときにも協力していただきながら、25 名ほどの仲間と一緒にできることからやってみようかと、女の方が３分の２でした。今から 10 年ほど前ですので、もう少し若かったですけれども、少し今よりはパワーが残っていたせいか、イベントを行って、初公開の日は松城家の住宅は 800 人の方がお見えになりまして、個人の住宅ですが、洋風の建築では民家で日本最古と言われている住宅です。まだこちらにお見えになったことがな

い方もいらっしゃるかもしれませんけれども、毎週日曜日の午前中公開してますので、ぜひ足を運んでいただければありがたいと思います。

そんなことから文化財の保存を契機にできることをやっていこうと始まったんですが、昨年、一昨年から国の補助金をいただく文化庁に手を挙げまして、「ヘダ号絆プロジェクト実行委員会」というものをつくりました。これは戸田の観光協会と沼津商工会戸田支所、それとＮＰＯ法人戸田どっとこむという三者が実行委員会をつくって行っているものですけれども、何ということか、いろいろなところが手を挙げた中で、おかげさまで採択をされましたので、ヘダ号に関する、ヘダ号は皆さん地域に近いですので御存じだと思いますので、ヘダ号に関する絆というのは、ロシアと日本の友好の中で唯一誇れる歴史なんですよね。

これを、地域の人たちはみんな知っています。近隣は知っているんですけれども、静岡県の中においても結構あんまり知らない方が多いですよね。観光にこれを生かさない手はないということで、とても自信を持って、今でも観光協会の方々、商工会の方々が、ディアナ号で亡くなった水兵の供養祭を数十年にわたって、秘密にしているわけではないですが、脈々と行っているわけですね。

そういうことがロシアにも通じて、下田にばかり来るんじゃなくて、大使館の方がお見えになったら戸田へ、そしてロシア大使館も、外務省も、すべてロシアの関係するときには、どうぞ戸田を忘れずにこちらに来ていただいて、一緒に参加していただき、日本のとても誇れる歴史として、どうぞアピールしていただきたいことを知事にもお願いをしておきます。

そしてもう一つ、こういうことでプチャーチンロードという旧道の中道を使ったまちづくりの回遊路を今つくっています。これも補助事業の中で行ってくることなんですが、いただく金額の額はすごい些細なものですから、ボランティアでほとんど全部やっているんですけれども、標識を自分たちで勝手に上田寅吉を「寅さん」というキャラクターにして看板をつけたり、来た方々が訪れて楽しいようなまちづくりの回遊路、それを１時間程度歩くことができますけれども、半分コースとかいろんなコースに分かれて、お寺とか由緒あるところ、文化遺産を生かした回遊路づくりを行っています。

そのために、ここでこうやって話をしてもわかりませんので、来ていらっしゃる方が外から見てわかるように、今インターネットの時代ですので、地域の総合データベースというものをその補助金を使ってつくりました。たかが 35 万円で。２年間で 35 万円。そして

このデータベースをつくったんですが、ある県のある市では同じものをつくるのに 3,000 万円だそうです。

ですから、そういうことがインターネットの世界ですとピンキリだということ、そういうことの行政の予算をすごくもっと民間の小さなところにもいろいろ精査していただいて、いろんなやり方があるんだということをおわかりいただきたいということと、せっかくできたものを新しい活性化センターができますので、そこで生かしていただけるということを民間ながら丁寧につくってきたつもりですので、行政の市もとても協力してくれましたので、一緒に協働できたと思っていますので、ぜひお使いいただいて、これが先ほど知事も言われた防災マップにもなり得るものです。

いろんな近隣、ここに備蓄品があるとか、ここは避難経路になるとかということが、すべてこのマップに入れることができます。あと観光情報としても、商業施設もすべて入っていますので、それがどんどん沼津市にも広がり、近隣にも広がっていってデータベースができるといいと思っています。ただいまこれは４月から公開していますので、戸田どっとこむと戸田観光協会と商工会のホームページでごらんいただければわかると思います。

もう一つ、そういうことから回遊路づくりで、お客様が来て楽しんで、滞在時間をふやすということをやっているんですけれども、やっぱりメインのところは松城家住宅を見ていただいて、おいしいカニを食べて、そして富士の景観、やっぱりこれは欠かせないものですので、今国民宿舎は休館になっていて、すごく寂しい状態のもとにあります。御浜にある高台にヘダ号の記録がある、ヘダ号の造船郷土資料館の内容物を津波で一気に持っていかれないためにも、深海生物館の大事な資料がなくならないためにも、ぜひとも高台への移転と新築をお願いしたいと思っています。よろしくお願いいたします。

＜発言者２＞

戸田地区の連合自治会長でございます。よろしくお願いをしたいと思います。

私はこの会で意見の発表をしてくださいということでお願いされてから、時間的にも少なかったんですが、私戸田地区ですけれども、隣の西浦とか内浦とか静浦地区の連合自治会長も含め、関係者といろいろお話をさせていただきました。それらも含めて意見の発表をさせていただきたいと思います。

まず初めに震災、津波の避難対策について、この問題から知事さんにお願いをしたいと思います。この土肥地区も含めて戸田地区ともに駿河湾に面しておりまして、今後想定さ

れます南海トラフのレベル２の対策につきまして、大変急がれているところでございます。

特に戸田地区は水産業が主要産業であるため、海岸地域に住居と人口が集中しております。このため避難ビルとなる高い建築物が少なく、民間の建物は液状化等の対策も含めて、なかなか問題があります。その関係で避難先としましては必然的に公共施設ということで、戸田の場合ですけど、小学校、中学校の校舎の屋上を使用せざるを得ないような状況でございます。

戸田地域では年に３回、津波の避難訓練等を実施しております。裏山がある地区は裏山へ逃げます。また戸田地区の中央部の住民は、小学校等の屋上への避難訓練を実施しております。このため沼津市に校舎の屋上へ直接上がれるように外階段の設置を要望しておりますが、現在のところ、なかなか了解が得られないというような状況でございます。学校の校長先生の方は、現場の責任者として、児童生徒の安全のためという自覚がありますので、屋上に上がる外階段について理解はしていただいておりますが、施設を管理する側の市の教育委員会になりますが、防犯上の問題ですとか、また財政的な問題でしょうか、実施に前向きでないようなのが現状でございます。まずはこの１点。

次に、急傾斜地崩壊防止対策としてコンクリートの擁壁が各地区に建設されているところもありますし、またこれから建設する場所もございます。この擁壁については高さが５メートルとか７メートルとか10メートル近いところもありますので、地域にとりましては津波の避難用の非常階段が設置できますと大変助かるわけでございます。現在のところ、土木事務所の方の見解によりますと、擁壁の強度が落ちるとのことで、なかなか許可をされていないのが状況でございます。

この擁壁の非常階段につきましても、各地区で多くを要望するわけではございません。各地域必要な箇所、１～２カ所に設置をお願いできるようになれば、大変地域としては安心、安全ということで、気持ち的にも、精神的にも安らぐわけでございますので、この辺知事の方から土木の管理者に指導していただければ大変ありがたいなと思っております。

それから戸田地区の漁協の事務所が、今現在大分老朽化しております。この地区には高いビルもございませんものですから、できればこの漁協の建物を新築、または改築していただいて、ここの屋上に避難できるような対策がとれればというふうに、地域の方は皆さん思っているような状況でございます。

また、この土地は当時、漁港施設として埋め立てたところで、強引に当時、事務所の用地として建設をしたという関係でありまして、これも土木の港湾の関係になろうかと思い

ますが、用地は建て替えについては目的外だということで、漁協の方でお願いをしても、なかなか理解を得られないというような状況になっておりますものですから、この辺も柔軟に考えていただければというふうに考えております。

それから次に富士山の世界文化遺産登録に関し、文化遺産センターの建設についてお願いをしたいわけですけれども、過日の新聞で富士山世界遺産センターを建設するという報道がございました。そこに９カ所候補地が出ておりました。その中で戸田の国民宿舎の跡地がその候補地の一つに挙げられておりました。戸田の観光のシンボルでもある白砂青松を見渡せ、富士山の眺望も絶景でございます。

現在、国民宿舎の跡地は観光の一番中心である御浜地区の高台の中央にあるわけですが、現在廃墟のような状況でございます。観光地としては大変イメージが悪いということでございますものですから、先ほど発言者１の方のお話にもありましたように、ここに博物館が岬の先端にございます。文化財の方は津波等で流される危険性もございます。できれば早く高台の方に移転をしたいと。その場合、この国民宿舎跡地に建設をしていただけたらというふうに考えております。また富士山の眺望もすばらしいし、第六次産業の核として水産業を中心とした地場産品の生産・加工、また商品の普及に役立てていけるのではないかというふうに考えております。ぜひともこの問題について沼津市の方と共同で建設の方をよろしくお願いをしたいというふうに思っております。

次に県道 17 号線、沼津土肥線の拡幅工事の早期実現についてでございます。沼津土肥線は、御存じのとおり、海岸線沿いに位置する、すばらしい海越しの富士が眺望できる道路でございます。また沼津－戸田間を結ぶ重要な生活の幹線道路でもあります。このため、以前から道路の拡幅、整備については、県当局にお願いをしておりますし、毎年陳情等も実施をしております。おかげさまをもちまして、一歩一歩ではございますが、整備されております。また戸田の西浦方面の方々も大変喜んでいるようなところでございます。しかしながら、まだまだ狭隘な区間が多く、一日も早く整備されることが地域住民の切なるお願いとなっております。

戸田地区は漁業と観光が主な産業になっております。しかし民宿など、観光の関連産業も衰退の一途でございます。観光客が戸田地区へ帰ってくるように、また富士山の世界文化遺産の登録、そして東駿河湾環状道路の開通を目前にしたこの時期に沼津土肥線の道路の整備も意を注いでいただいて、県道 223 号と連携した観光振興策で、日本の全国の方々を初め、外国の皆さんにもこのすばらしい景観を堪能していただきたいと願っているとこ

ろでございます。よろしくお願いをしたいと思います。

最後に、高齢化対策についてお願いをしたいと思います。この問題につきましては、いろいろ民間でやるのか、市でやるのか、県でやるようになるのかということで、問題はいろいろあろうかと思います。地域としましては、過疎化、少子化が顕著になっておりまして、老々介護の世帯が年々ますます増加をしております。このために地域コミュニティも、またその他もろもろの地域活動も衰退しているような状況でございます。限界集落となっても、地域で共助共同した生活ができるような対策を講じていただけないかと願っております。

その中でぜひ老人の介護施設の建設、または現有の戸田－土肥間で建設をしました土肥ホームがございます。これらの増床を図っていただければありがたいと思います。よろしくお願いをしたいと思います。

＜発言者１、発言者２に対する知事のコメント＞

発言者１さん、発言者２さん、どうもありがとうございました。それぞれ女性と男性で、発言者１さんの方はソフトのパワーを重視していらっしゃるわけなんですが、発言者２さんの方はハードの方を上手に言い分けられまして、戸田の抱えている問題、また戸田の持っている可能性というのをお二人から伺ったという思いでございます。

戸田は漁業と観光、そのとおりですね。そして重要文化財をしっかり地域として守って、かつＰＲしていこうということで、そのときに女性が多く立ち上がったというのが、これからの時代に本当に男女共同でやらなくちゃいけないという、また今までどちらかというと女性の力が発揮されないような社会だったわけでありますけれども、これからはそうじゃないんだというそういう新しい動きを戸田の発言者１さん以下、女性の方たちが発揮されているということを大変頼もしく思うわけでございます。

また「ヘダ号絆プロジェクト実行委員会」が結成されて、なるほど伊豆半島と言えば下田で、下田の黒船祭りは 70 回近くやっておられますね。それが結果的にアメリカの人たちを動かしまして、アメリカのペリーが生まれたロードアイランドの町で黒船祭り、ブラック・シップ・フェスティバルというのを数十回も毎年やっていらっしゃるんです。ですから、日本発のお祭りがアメリカに影響した、そして交流が進んでいると。

今度同じときに、ロシアの船が難破してそれを見事に戸田の方たちが建造して送り返されたということで、このロシアと日本といいますか、ロシアは戸田に、戸田だけではあり

ませんけれども、どちらかといえはアメリカが下田、ロシアは戸田というふうになりますと、伊豆半島だけでユーラシア大陸とアメリカと両方にらむことになるので、この絆プロジェクトはぜひ発展させたい。

それでアメリカとの関係にはいろいろと経済的な関係もありますし、軍事的な関係もありますけれども、ロシアとの関係はこれからということで、その先導役を静岡県、なかんずく戸田になっていただきたいということで、こちらに農林水産省から来た職員がいるのですが、普通は２年で帰るのが３年、３年が４年になりました。それくらい熱心にしてくださって、そして静岡県の海産物をロシアに売って、そして大変喜ばれるということで、今はまだ大きなパイプにはなっていませんけれども、それを開かれているんですよ。そうしたことを広げていきながら、ロシアと日本との関係をプチャーチン、それから戸田との関わりを中心にして育てていくことができるというふうに思っています。

そしてその発信のためにいろいろな人が要求するんですけれども、30 万でなさったというのはもう画期的ですよ。通常は 1,000 万単位です。先ほど 3,000 万とおっしゃっていましたけれども、100 分の１じゃありませんか。これがソフトパワーですね。これからこういう知恵を出すことが本当に大切です。そういう知恵は、今までどちらかというと男性諸氏の方が中心になってきたわけですけれども、女性のパワーを上手に入れ込んでやるといけるんじゃないかと、ロシアとの関係も。期待しています。

それで発言者２さんからもたくさん要望いただきまして、いずれそういう津波が来ると、10 メートルを越す津波が来かねないということでね。それをレベル２と言います。1,000 年に１回ぐらいだと。これは来たら大変ですよ。そうするとどうしたらいいかということで、全部をコンクリートの壁で覆おうとしても、この美しい海岸線がめちゃくちゃになりますね。

そんなことはお金もないし、必ずしも賢明ではないということで、レベル１、100 年に１回ぐらい来るであろうものについては、海岸線が静岡県は 505 キロございますね。そのうち二百七，八十キロぐらいのところに人が住んでおられたり、工場がつくられたりしているわけです。そのうちの 90%はもう終わっているんですよ。ただしレベル２というものすごい津波ですね、マグニチュード９、南海トラフの巨大地震、そして時速 50 キロぐらいでバーンと迫ってくると、船や家が迫ってくると。そうしたものに今までつくっていたレベル１の防波堤や防潮堤が耐えられるかというと、これを今調べようということです。しかし十分に耐えられると思えないので、かさ上げをして、仮にレベル２のものが来ても壊れ

ないということだったら、4,200 億円ぐらいかかるんですけれども、10 年間で。これを完成すれば被害は今 10 万 5,000 人と言われていますけれども、これを２万人程度に抑えることができる。これはだからゼロにするのが目標です。

しかし、この南海トラフの巨大地震を止めることができますか。できないですよ。富士山の噴火も止めることはできません。起こったときに被害をいかに小さくするかというそういう防災というか減災ですね、災害を減らすと。被災を小さくするということができるということで、我々は自分たちの力、日本の力を考えて、レベル１で防災先進県ですから、そこを強化して、そしてそれだけでも防げますから、ただし越波といいますか、乗り越えてくるものがあると、これにさらわれると大変なので、そのときに差し当たってすぐ逃げなくちゃいけない、避難タワーへ。

避難タワーは、この間の 3.11 以前は７つしかなかったんです。今 35 ありますよ、静岡県下で。そして 35 ありますけれども、これ１個 4,000 万円ぐらいかかります。しかもほとんどが県外の会社です。それをつくったのはいいですけれども、見に行かれたことありますか。ここにもあるかもしれませんけれども、あれ平時に何に使います？全く使えない。50 年たったらさびてだめですよ。

一方で例えばいろんな知恵を出されていますね。吉田町などは歩道橋を拡張して、平時には歩道橋です。しかし有事にはその上に逃げられる。あるいは吉田町は全部平面でしょう。だからそのまま来るんです。そうしたところでは命山をつくりましょう。つまり丘をつくろうというわけです。丘をつくれば、しばらくすると植物が生えてきますから、昔からあったように見えますよ。これは半永久的に残るわけです。どちらが賢いか。もちろん命山をつくる方が、これはお金がかかります、当初は。しかし平時には上に子供たちが上って、自分たちの町を見ることができる。そうしたものが初めからあるところがあります。こういう裏山ですね。

だから裏山を活用するというのはまず大事ですね。しかしそれができない場合にはどうするかということで、今発言者２さんがおっしゃったように、避難ビルを指定すると。これは学校だと。学校が避難ビルに指定されても上れなくちゃいけないから、そういう階段をつけるというのは、これは県とか市のほとんど義務だと言っていいと私は思っております。

ですから、どこだということがわかれば、きょうはたまたま国土交通省出身の沼津市副市長さんが来ておられますけど、この方と一緒にやっていきます。

そして漁港には、それこそその２階で関係者の方と親しく１時間ほどお話をして、ちょっと老朽化しているなということは感じました。そしてそのお話も承っておりますので、あそこは仕事場のすぐ近くなので、逃げるとすればその上に逃げるというのは賢明だと思いますので、ちょっとそれ耐震性をしっかり見させていただいて、これも県も市もあったもんじゃありませんで、一緒にできることがあればやっていくということですね。

私は漁業に関しては、戸田の漁業組合は先ほど申しましたように、平成 22 年ぐらいに、たまたま野菜を売っていらっしゃるところが、もう先細りになっていると。そこで一緒にお魚を売ったら喜ばれたと。それが今韮山だとか富士宮にまで広がって、そういうファーマーズマーケットでお魚を移動の車で、今車４台ありますよ。そのうち２台は立派な冷凍車・冷蔵車です。もう１つは軽トラック、ケットラですね。そこの後ろの荷台のところに上手な冷蔵のものを置かれて、そして新鮮なまま持っていってお客様に喜ばれていると。だから農協と漁協がコラボしている見事なものですよ。静岡県下で唯一じゃないでしょうか。

だから漁協・農協というのはなくて、お客様にとっては海産物と農産物が一緒に手に入る。また漁協の方が売りに行かれたら、そこで新鮮な野菜や農産物を売っているわけですから、それを持って帰れるでしょう。その逆もそうです。農協の方もそれを買えるから。こういうコラボをやっているんですね。だからものすごい知恵があるというふうに思っています。そういうことをしておくと、例えば富士宮と、あるいは韮山と、伊豆の国と、そうしたところの農協さんと絆ができるので、いざというときにお互いが助けられるということがあるということで、防災に対してはハードだけではだめなんですね。自助共助公助といいまして、まず自ら助けると。

津波に対しては防ぐすべはないと言った方がいいと思う。もう逃げる以外にない、高いところへ、内陸にということで、私は戸田のさらに北側の西浦、あそこのところは重須の方が８割の人が行きたいと言ったんです。なぜそれが行けないんですか。経済的問題でしょう。だから先ほど申しました農道が 5.3 キロでき上がりますと、真ん中に大きな命の道ができるということですから、その両側に家があれば、同じ高さのところに中学があるんですから、下りれば仕事場です。上れば家があるというふうにすればいいと。今 5.3 キロのうち 1.3 キロぐらいできています。これは農道としてではなくて、生活道路としてつくって差し上げたいと我々は思っているんです。

あとどういうふうにするかは、西浦と、それから内浦の住民の方と市と我々との知恵の

出し合いです。そうすると初めから困ることはない、初めからそこに住んでいれば。仕事の人たちが海に行って、ぱっと漁協の屋上に逃げればいいとかいうことをすれば、家族のことを心配しなくていいから。そういう今この全体の地形を利用して、どのように将来の子孫に大きな災害を起こさないようにするかということだと思います。

お金は今２兆円の赤字です、我々は。だからもうお金がないので、国は 1,000 兆円でしょう。ないからと言って放っておけないので、とりあえず我々は自分の身を削る。身を削ると今度は消費に響きますので、消費に響くとデフレが続くからだめだという非常に難しい選択を迫られているんです。ですから皆が困っているので、一緒に力を合わせて、自分たちはこういうふうにやっているからという知恵を出し合う。3,000 万も要求しないで 30 万でやってしまったというこうしたものの方がパワーが出てくるんですね。私はきょうそばで聞いていて、女性パワーに軍配ありという感じです。失礼ながら。私も男性なので負けている。以上です。

＜発言者３＞

皆様、こんにちは。土肥温泉旅館協同組合の発言者３と申します。よろしくお願いいたします。

我々旅館業を営んでいる観光業に従事している立場の人間で、観光にすごく力を入れて知事にお願いをしたいということを言いたいところではございますが、ちょっと違うお話をきょうはさせていただきたいなと思っております。

去年の 12 月 22 日に「ありがとう」という店舗をこの土肥でオープンさせていただきました。そこは地場の直売場になるんですけれども、どこにでもあるような直売場なんですが、たかだか 20 坪ぐらいの小さなものでございます。ただ、今松原公園の前、土肥でも今ちょっとランドマーク的な場所であります、ちょうど中心部であるところでございますけれども、そこにお店を開くということが、果たして旅館組合が開くことに対してどういう意義があるのかというようなことも含めて、いろんな形で旅館組合の総意をまとめるのにすごく時間がかかりました。

まずはこの土肥の地区、今人口が 4,300 人というふうに伺っております。そのうちの 65 歳以上の人口の方は、42％ぐらいであるというふうに直近のデータが届いておりますけれども、そんな中で年間約 35 万人の宿泊客を相手にする旅館業、あるいは民宿業、ペンションの人たちがやるには、やはり無理がいろんなところで生じるわけでございます。

今夏真っ盛りで、今土肥の海岸で恐らく 1,200 人、1,300 人ぐらいのお客様が海水浴を楽しまれていると思います。小さなお子様も当然その中にいらっしゃるというふうに容易に考えられると思いますけれども、そんな中で、まずこの土肥の中でじゃ何ができるのかということで、ほかの自治体でもやられています農業・漁業・観光業を一体化して、新しい経済構造を改革していったらどうかというようなことを旅館組合が考え、あそこの店をオープンした次第でございます。

当初は、すぐ下に芝生広場ですごく広いところがあるんですけれども、そこに大きな商業施設をつくろうというふうな形の大きなビジョンで大きな絵を描きました。伊豆市の方にそれを持っていったら、何を言っているんだという話で、ちょっと言葉は悪いですが、よくもっと地に足をつけたことで考えてやりなさいということで、何回も突き戻されて、それではじゃ既存で今ある「ありがとう」という 20 坪の店をオープンすることによって、そこでモニタリングをしたらどうかというようなお話をいただきました。

中期的な目で考えて、３年あるいは５年間でそこの売り上げがどんな売り上げで推移するのかを含めて、その後にその芝生広場に新しい商業施設、新しいビジョンに向かっていったらどうかというようなところで、我々もありがとうございましたということで伊豆市の方の強い理解をいただいたということで、今に至るわけでございますが、８月の５日まででオープンしてから約 230 日が過ぎました。230 日が過ぎまして、そこの「ありがとう」の売り上げが約 2,300 万強、つまり１日 10 万円ちょっとですけれども、10 万何千円のところなんですが、売り上げが立っております。

中身をちょっと話させていただきますと、そのうちの８割が出品していただいた生産者の方にバックをしております。その 20％で我々旅館組合がその建物の総工費だとか光熱費だとか人件費だとかということで、そこで賄っているんですが、旅館組合はかつかつの状態でございます。ですが、本来だったら旅館組合である以上、旅館の利益のことを考えてやることなんですけれども、今回そういうことは全く関係なくて、この町で何かそういった新しい経済の改革をしようという形のものでスタートしたんですが、つまり順調に売り上げも推移をしているというふうな状況でございます。

話を戻しますと、市の方から３年、５年、中期の計画でこれをやったらどうかということで、もちろんそれをこちらの方で理解をして始めさせていただいたものなんですけれども、そんなことを言っていては、とてもじゃないけれども、この土肥もどうなるかわからないというようなことで、それぐらい緊縮したような状況になっているのかなというふう

に思っておりますので、まずは来年度、４月には次なるビジョン、芝生広場の広いところに新しいもう少しグレードアップした商業施設をつくるというようなことも踏まえて、まずはテーブルの上に載せたいなという我々旅館組合としては総意として思っております。

つきましては、それはかなりの総工費がかかると思います。まだ全くこれは我々が身内で話をしているレベルの話でございますけれども、まず１階には今の「ありがとう」という直売場のグレードアップをした施設をつくり、２階にはテナントを募集し、そのテナントというのは、この土肥の町もすぐシャッター通りで、お客様に御案内をして歩かせても、「きょうは定休日なの？」と言われるぐらい店が少なく、開いているはずの商店が、きょうは都合により休みでシャッターを閉めていたり、そんな状況でございます。

それならば、そこの新しい商業施設の２階のところにテナントで入っていただいて、あそこに行けば、どこか10軒あるうちの１軒は何か食堂がやっているよとでも構わないと思います。そういったところでお客様の方に行っていただく。もちろん地元のお客様もそこに集うことがまず第一だと思いますけれども、そういう場所になって初めて観光客のお客様に足を運んでいただけるのかなということは重々承知しております。

３階に、あそこは温泉が引いてあります、今立派な足湯もございますので、そういった温泉を利用した簡単なスパ施設、足湯でも構いません、入浴施設でも構いません、そんなものをやったらどうかなと。

次、屋上なんですけれども、ここにはちょうど、あそこの４階部分が屋上になりますと、ちょうど松林から向こう側に本当にきれいな夕日が見えるぐらいの高さになると思います。そこでテラスでお茶を飲みながら、お客様、あるいは地元の人たちがそこに集っていただいて有意義な時間を過ごしていただくようなことができればなと。

本題なんですけれども、そこに津波の避難タワーを併設してつくることができないかなというふうに思っております。一番多いときで土肥の海岸なんですが、お盆の一番繁忙期のときで約 2,000 人ぐらいの海水浴のお客様がいらっしゃいます。大きく分けますと 700 メートルの長さの海岸の中に、大体半分ぐらいのところのビーチのすぐわきには津波避難タワーに指定されている旅館がございます。半分ぐらいは、まだその避難タワーに指定されている旅館からちょっと遠いところで皆さん泳いでいるような状態なんですね。

まさにそこの避難がかなり困難なところにいるような海水浴のお客様に対しても、すぐ避難ができるような場所で今回我々は新しいビジョンを考えているその商業施設をというふうに思っておりますので、観光客のお客様はもちろんのこと、地元住民の方もそこに行

って集まっていただいて、つまりそこで避難も用意できるというふうなことでしたらどうかなというふうに思っております。

調べましたところ、今の海抜が、あそこが我々が今度やろうとしております芝生広場のところは海抜 3.5 メートルでございます。津波避難タワーを４階につくるとすると、一番上が一番低く見積もっても 25 メートルのところができるのではないかなと思っております。収容がどれぐらい入るのかということも含めて、まだいろいろ考えなきゃいけない部分もあるんですが、一応土肥の状況としてはそういう状況です。

4,300 人の本当に小さな町でございますけれども、そこで 20 坪の直売場、ここで１日 10 万ちょっとの売り上げが立っていて、そのうちの 80%が生産者の方にバックされているというふうな状況で、非常に生産者も頑張ってやっている状況の中で、次なる新しいビジョンに向けて、生産者も含め、我々旅館協同組合も含め、何か大きなことでこの土肥の中で、また西伊豆の中でもモデル地区として土肥温泉がこういった形でなっているよ、しかも防災施設も兼ね備えたというようなところで御理解いただき、また伊豆市長も含め、知事も含め、いろいろなことで御教示をいただきながら、助成あるいは補助というような形で、それに向けてお力添えをいただきたいなというふうに思っております。以上です。

＜発言者４＞

よろしくお願いいたします。まずこのお話をいただいたときに、私がここで何を話したらよいのかということを振り返ってみました。何をしてきたかなということで、何を話そうかと、いろいろ考えたんですが、きっと私が今ここで話さなければいけないことは、子供たちに対して私たちがしてきたことかなと思いまして、それが私の役目かなと思いまして、子供たちへの思いと、やってきた活動内容をお話しさせていただきたいと思います。

15 年ほど前だったと思うんですが、中山間地域の活性化ということで、県の方の事業だったと思うんですが、地域の方を集めて、これからどういうふうにしていこうというような会合があったようです。私はそれにちょっと参加してなかったので、よくわからないんですが、何度か会合を持たれて、こんなふうにという話がまとまったようです。そこでお話が終わったんですが、それに出席されていた方々が、このままで終わらせてしまうには何も残らないということで、地域を皆に見直してもらおうということで「はまぼう倶楽部」というものを立ち上げました。

八木沢にあります丸山運動公園があることはみんな知っているんですが、八木沢に住ん

でいる人自体も、そこに何があるかもわからない。ハマボウという素敵な花があります。桜もいろいろな種類が咲いております。お堀がありまして、魚もいっぱいいるんですけれども、そういうものをみんなが知らなかったということで、まずそこを知ってもらいたいなということで、何を始めようかと考えまして、春と秋にフリーマーケットを始めることにしました。それを始めることによりまして、「初めて来たよ」、本当に地域に住んでいる方なのに、「こんな桜も咲いていたのか」なんていう話もありまして、皆楽しく、また丸山公園に足を運んでもらうようになりました。

そういうことをやっているうちに、私たち田舎なんですが、子供たちがその割に田舎の遊びを知らない。私なんかは古い方ですから、山に行ったりとか、虫を採ったりとか、子供同士でやっていたんですが、やっぱり子供が少なくなってきますと、子供同士でそういうことをすることもないし、親がなかなか皆さん忙しいようで、連れていくこともないということで、地域のことはやっぱり地域、里山もありますし、いろんな遊ぶ場所があるわけですよね。

そういうことをじゃ私たちが指導者になって、子供たちにそういう遊びを教えようということで、自然体験の指導者の講習を受けましてリーダーになり、そういう資格を取りました。そして補助金などもいただきながら、自然体験、里山遊びとか、海の近くですから磯遊びなどもして、子供たちにそういう体験をしてきました。

私たちがすごく思うのは、子供が生まれた土地を好きであってほしい、ここにいると落ち着く、どこかに出ても、あそこの浜辺に座って波の音を聞いているとほっとするとか、そういう場所というものを心に残しておいてほしいなという思いがありました。ですから、ただ田舎に住んでいるから何でも知っているわけじゃなくて、山に行けばこういう遊びができるよということを教えたり、海に行くとこんなものが採れる、こんなふうにすると魚が採れるよみたいなことを知ってほしいなということで、そういう活動をしておりました。

それからもう一つ、私ここに書いてあるお話の会「くすの木」というものの代表をしているんですが、本の読み聞かせなどを小学校とか幼稚園とか中学校でやっておりました。それをやるうちに、土地で土肥の民話を語られている方が自分の作品を 50 話ほどつくりまして本にまとめました。

その方は前から幼稚園とかそういうところで土肥の民話を語っていたわけですが、それを私たちもそういうものを土肥にはこんなお話があるよということで、私たちもやってみようということで、「くすの木」という会をつくりまして、幼稚園とかそういうところでお

話をして、こんなお話があったよなんていうことで、それをみんな子供の中に入っていけばいいなと思っています。

また読み聞かせや自然体験をすることによって、子供の感性を育てたいなと思います。きれいなものを見て「きれいだ」とか、おっかないところに行くと「怖いよ」とか、そういう思いを残してあげたいなということでやっていることなんですが、なかなかこういう地域ですので、仕事もないので、社会に出て戻ってくるということが少ないかなと思うんですけれども、どこかほかのところに出たときでも、「ああ、土肥ってこんなことがあったな」とか、「いいとこだったな」「昔こんな話があったよな、あそこには」と思い出して、何か機会があれば、「そうだ、じゃ土肥に戻ろうか」と思ってくれるような子供たちを育てたいなと思いながら活動しております。

県への提言とか意見というものがないんですけれども、私たちはお金もないし、何もなくてもできることなので、細々ではありますが、子供たちのそういう気持ちの豊かさを育てるために続けていきたいなと思って活動しております。以上です。

＜発言者３、発言者４に対する知事のコメント＞

いいお話を承りまして、発言者３さんはこの「ありがとう」が昨年 12 月、二百数十日で、１日に直せば 10 万円の売り上げをキープされていると。そしてその８割方は生産者に戻して、２割は皆様方の方に維持費などのために使われると、これはとてもいいお話ですね。ですから、そしてまたそこから出てきた新しい構想として、その「ありがとう」というのが１階にあって、２階にテナント、３階にスパ、そして４階に平時にはカフェ、いわば展望台みたいな形で使うというこういう新しい発想ですね。

有事に備えつつ平時には楽しいように使うというような、これからはそういう発想をしていくように建物をつくらなくちゃいけないというふうに思いますので、何とかそれできないかなと。具体化したときに、我々あるいは伊豆市長さんとも一緒に相談をして、助力ができるなら助力を惜しみません。そういうふうに平時と有事を両方考えるというのがとても大事なことですね。

それからまた地場産品を売られているということですけれども、この地場産品が半端な数じゃないんですよ、我々がつくっているものの種類が。なぜかというと、雪が降らないでしょう。もちろん天城のてっぺんだとか、富士山にも降りますけれども、人々が生活されているところの大半に冬、雪で外に出られないとか、あるいは雪おろしをするとかとい

う、日本海側では当たり前のそういうことが全くありませんで、したがって四六時中、あるいは四季を通じて何がしかの食べ物やお花が咲いているわけですね。

そうした恵みがありますので、地場産品の私は全部リストアップをして、実はリストアップをするというようなことを言いましたけれども、県の方もしてなかったんです。つくっているでしょう、これを東京の市場に持っていって、農協さんで販売してくださいというふうなことだったんですけれども、今は地域で地場のものを消費するのが健康にもいいし、流通費もかからないし安全だし安心だし、そして生産者にも喜んでもらえるしということで、地産地消を進めているためにリストアップをしてみようということで、これは県全体ですけれども、農産物が 339 品目あります。これは平成 23 年の数字です。ところが第２位が鹿児島県なんですけれども、160 品目しかないんですよ。だからその２倍以上あるわけです。339 ですから、ものすごい数です。

それからこういうような漁港、特に深海のものなんていうのは、もう駿河湾の特徴でしょう。そして魚介類についても、先ほど紹介した農林水産省から来た職員のことを言いましたけれども、彼が数えてくれて、ダントツなんですよ。100 品目なんです。ちょうど、別に四捨五入したわけじゃなくて、100 品目が平成 23 年で採って売られているということです。ちなみに第 2 は鹿児島県で 58 です。ですから、向こうは足すと 218 です。うちは足すと 439 ですから、ダントツなんですね。

その結果、それは食材の王国ですよと。こういうものを使ってくださるレストランの数、飲食店の数は本県２万あります。そのうち１％の 200 店ぐらいは、きっといい食材をそろえて、そしておいしいものをお客さんに提供しているに違いないということで、それを食材の王国を食の都にしてくださる仕事人として認定しようとしたら、200 人どころか、今 327 軒のレストランが認定されています。別に高いところじゃないんですよ。そういうのと結びつくんですね。

ですから、できればこの伊豆半島、特にこの近辺、あるいは場合によっては静岡県のものを優先的にお使いくださって売ってくださると。ちなみに戸田の漁協では余りにお客さんとの信頼関係ができたので、こういうものを今度持ってきてちょうだいというふうに言われて、それを沼津にまで朝早くに行って取りそろえてファーマーズマーケットで売っておられるというようなことができているわけです。

だから静岡県全体ではものすごい農産物、それから魚介類、日本一ですから、そこに食べに来なさいと、買いに来なさいと、実際に新東名に来ているでしょう。１カ月で 593 万

人来たんですよ。スカイツリーは 581 万人ですから、12 万人抜いたわけです。大記録ですよ。何も宣伝してない。口コミで、３カ月で 1,300 万の人がＳＡとＰＡに来たんです。半年で 2,400 万人来たんです。ものすごい数です。だからこれは渋滞してないんです。ＳＡとＰＡだけがそういう飲食を中心にして大混雑している。だからちょっと工夫をすれば、あそこに行けば売っているから、あるいは食べられるからということで、ちょっと工夫すれば、この「ありがとう」も大化けするかもしれないです。しかも景色がきれいだということがありますので。

ですからこういう試みを新東名でやっているＳＡやＰＡなどの成果に学びながら、建物はちょっと工夫をする。例えば浜松に行かれるとピアノ風につくってあります。森町のＰＡは宿場町風につくってあります。沼津あたりに来ると地中海風につくってあります。だから建物自体もその雰囲気に応じた形でちょっと工夫するだけで、珍しい建物ということで、きれいな建物ということで、風景を上手に生かしたものをつくると、この「ありがとう」も大化けする可能性があるというふうに思いますね。

これ工夫をぜひしていただいて、例えばこちらで椎茸とかワサビ、『わが母の記』で有名になりました、ワサビ田が。そして椎茸は風評被害ですけど、検査すれば全部それ以下です。むちゃくちゃおいしいですよね。ですからそういうのをちょっと焼いて、ワサビをつけて食べると、これはもう一杯飲みたくなるでしょう。ともかくそういうおいしいものをおいしい食べ方と同時にやっていくと、そういうセンターにできるというふうに思いましたね。

それから発言者４さんは本当に御立派だと思います。子供を中心にしてずっとやってこられたというのはすばらしい。そしてこちらのハマボウですね、日本原産のハイビスカスですけれども、これをクラブの名前になさって、桜も実はいろいろな種類があると。桜が１月に咲くのは伊豆半島だけでしょう。これは熱海ですけれども、２月には有名なカワヅザクラ、こちらは松崎でオオシマザクラが咲きますよね。伊豆半島のちょっと北の三島にございます国立遺伝学研究所のところでは 200 種類ぐらいの桜をつくっているでしょう。だから実はこれお花の半島です。

ですからそういうものを、オオシマザクラは３月でしょう。松崎のオオシマザクラの葉っぱが桜餅の桜ですよね。「君知るやころは弥生の松崎の大島桜の花の白さを」というふうに言うじゃないですか。弥生ですから３月に咲いているわけです。ですからそういう花の半島ですから、そういうことを知る。そしてどれぐらいの食材があるかを知ると。そして

その知っている現場はジオサイトでしょう、ジオパークでしょう。

これは川端康成が言ったじゃないですか。1930 年代、戦前ですよ。「伊豆は詩（うた）の国である」、「うた」というのは「詩」という字を書いてあります、ポエムですね。「詩（うた）の国である」「伊豆半島は日本歴史の縮図である。伊豆半島は南海の」、南の海からの贈り物ですから、「南海の模型である。伊豆半島は海と山の風景のあらゆる風景の画廊である。伊豆全体が一大公園である」と、こう言っているわけです。詩人というか、文学者の目で見ているわけです。ものすごくきれいなところです。

しかもジオパークに認定されて、２年後には世界ジオパークになります。先ほど富士山の話が出てましたけれども、富士山はもう既に世界文化遺産になりました。だから世界標準の景観の中で、豊かな水と太陽光は日本一ですから、水と太陽で豊かな生命が育まれて、そうしたものが見られるし、味わえるところだということで、それを子供たちに自然体験として教えるということをなさっておられる。

それから今は我々黙読をしますけれども、読む、すなわち音に出す、音で覚える。おばあちゃんの声、おじいちゃんの声、おじちゃんの声、これを物語と一緒に語り口を覚える、これが大事ですね。子供のことをどう考えるか。今子供の数がだんだん少なくなっているでしょう。これを止めないといけないということで、それで先ほど発言者２さんの方から高齢者の問題が出てきました。

高齢者については食べ物がいいから、健康寿命が日本一であることは御存じですね。健康寿命というのは、年をとっても日常生活に支障を来さない年齢のことを健康寿命というふうに言いまして、世界保健機構というＷＨＯという機構がありまして、それが単に長生きするわけじゃなくて、健康で長生きすることが大事で、それこそ本当のモデルはどこか。日本だと。日本の中で厚生労働省が調べたら静岡県だったんですよ。健康寿命が一番長い静岡県。

どうしてか。その理由は食べ物がたくさんあってバランスよく食べられる。それがこういうふうな形で社会参加をする人が比較的多い。それから簡単なスポーツを持続的にされている人が多いということで、すごいというので厚生労働大臣から去年最優秀賞をもらっているんです。ですから、我々は案外世界の高齢者のモデルになっているんですよ。

だからもちろん必ず体は弱ります。したがって、そのための病床であるとかは準備しなくちゃいけませんけれども、大切なことは自分の健康を長く維持することが、実は世界の人のあこがれのそういう土地になっているということです。だから死ぬまでに１回伊豆半

島に来いという感じですね。そういう地域なんですよ。

それをそういうところだということを、子供にジオサイトです、ジオパークですよと、そしてどういうお花があります、どういうお魚がいますといったようなことも含めて教えて差し上げる。それをこのお話の会などを通してやっていらっしゃることがすごく立派だというふうに思いまして、これもさっきの発言者１さんと一緒で大したものだと思いますね。

さっき発言者２さんの御質問の中で、富士山の世界遺産センター、これ私が決められないんですよ。決めるには富士山世界遺産センター基本構想策定委員会の先生方たちが９つの候補地の中から今選んでくださって、今月中には確実にそれを選んでくださるということで、それぞれ皆自分たちが一番いいところを持っているというふうに言われているので、私は残念ながらこれはお約束できないということを申し上げておきます。ただ、国民宿舎が宝の持ち腐れになっているということはよくわかりました。

それから沼津土肥線ですね。これはおっしゃるとおり、今あそこを重点的に、大きな観光バスが交差できないところがあるでしょう、そこを重点的に、きょうはそのために修善寺の土木事務所に行って確認してきたというわけですから、そこを拡幅するというそういう準備をしているというか、そういう作業に入っているところでございます。とりあえず感想を申し上げました。

＜発言者５＞

発言者５です。最後になりますので、もうしばらく我慢していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

私の方から頭を痛めていることが２点ほどありまして、その２点について述べさせてもらいたいと思います。１点目なのですが、この４月より伊豆市の消防団土肥方面隊長を仰せつかっております。その関係で消防・防災の関係をお話しさせてもらおうと思ったんですけれども、発言者２さんですとか、いろいろお話が出てますので、私の方からはさらりと流したいと思います。

先ほども南海トラフ地震レベル２ということで、非常に大きな被害が出るということです。伊豆市の被害ですね、非常に大きい被害です。そのほとんどが土肥地区だと思います。あえて数字の方は申しませんけれども、4,200 名の人口のうち３分の１が大きな被害を受けると思います。

そのうち消防団として何ができるのかということなんですけれども、火災のときにはいろいろこうしよう、ああしようと想定ができるわけですけれども、いざこの災害につきましては全く想定ができないと思います。警察、それから常設の田方消防と協力しながら活動していくつもりなんですけれども、田方消防におきましても、土肥の西署につきましては５名の体制でやっているということです。５名の体制ということは、１回救急等で出ますと空白の時間ができると。その間、南署より応援が来るそうなんですけれども、それでも 30 分、40 分かかってしまうということです。ここのバイパスができれば、もっと時間短縮できると思うんですけれども、そういった中、消防団として何ができるのか。まして年々団員が減少しております。今３分団約 100 名の体制で土肥方面隊活動しておるんですけれども、非常に心配でございます。

続きまして２点目なんですけれども、仕事柄農業についてということで、やはり農業におきましても、また高齢化、後継者不足等、いろいろ農地も荒れ放題でございます。土肥地区の基幹作物であります花と椎茸なんですけれども、その椎茸につきましては、過去からずっと農林大臣賞、それから林野庁長官賞、それから県知事賞もいただいて、受賞されておる本当の日本全国有数の産地です。どこに行っても土肥の椎茸と言えば名が通っております。椎茸の大産地の大分、宮崎に行っても、土肥から来たと言えば話は通じます。

それほどの産地なんですけれども、その椎茸が非常に 3.11 以降、価格が暴落しております。知事も、お茶のときには先頭を切って活動していただきましたけれども、土肥の基幹産業であります椎茸産業においても、本当にお願いしたいと思います。市長も一生懸命取り組んでいただいておりますけれども、本当に何とかしないと山も荒れてしまうと思います。

また、ここ数年、その椎茸なんかでもそうなんですけれども、クヌギの新芽をシカが食害して、クヌギ山がクヌギ山でなくなってしまって、雑木の山になってしまっております。クヌギの新芽を食害すると、木は一生懸命そこから新芽を出そうと思って、もっと新芽を出そうとします。それをまた食害されて、２回食害されるとその株はもう枯れてしまいます。その中で本当にクヌギ山がクヌギ山でなくなってしまっております。

クヌギ山ばかりでなくて、本当の水田、それから畑等でもイノシシ、それからシカ、本当に人家のすぐそばの畑まで来ております。年配の方が一生懸命いろいろつくっても、本当に一晩にしてなくなってしまいます。猟友会さんも一生懸命頑張ってもらっておるんですけれども、やっぱり猟友会さんも高齢化なんですよね。昔ほど山をかけずり回るわけに

はなかなかいかないようで、本当に苦労しておると思います。根本的な解決が必要だと思います。

伊豆市においても助成金等を出していただいておるんですけれども、年配の方には、やはり電気柵ですとか、トタンですとか、農地を覆う手間もなかなか難しいと思います。中にはイノシシが家に来ないように、家の周りを電気柵で囲っている方もいらっしゃいます。本来電気柵というのは水田ですとか畑の周りをぐるっと覆って、そこにイノシシが来ると、鼻でさわってしびれて次から来なくなるというものなんですけれども、家の周りに来て困るから家を電気柵で覆うと、そして防ぐという方もいらっしゃいますので、それも変な話だなと思いますけれども、そうせざるを得ないという状況でございます。

本当に土肥地区って私もこっちに帰ってきて30年になります。本当に海の幸山の幸に恵まれていいところだと思います。何でこんなところに若い人は帰ってこないのかなと思うぐらいです。先ほど富士山がとかという話がありましたけれども、私は恋人岬から見る富士山が日本一だと思っております。当然反対意見もあると思うんですけれども、私は絶対に恋人岬から見る富士山が日本一だと思います。

それにカワヅザクラの話も知事からありましたけれども、私のうちにある桜は11月過ぎからぱらぱら咲いております。１月、２月、大体２月の末までずっと楽しめます。友達と花見に出かけてやろうと思ったんですけれども、１月、２月で寒くてとてもできなくて、非常に友達に怒られたことを覚えております。ですので、そこら辺を知事さんにもいろいろ考えていただいて、私の方の意見を終わりたいと思います。よろしくお願いいたします。

＜発言者５に対する知事のコメント＞

ぜひ今度11月、12月に発言者５さんのお庭で一杯熱燗でやりたいというふうに思った次第でございます。富士山をどこから、西浦から見る富士山、戸田から見る富士山、土肥から見る富士山、どれも反対はしません。つまりどこから見ても最高に見えることを許してくれるのが富士山という存在で、ですからどこから見えるのが最高か、金メダルをあげましょう。金メダルが無数にある。それを可能にしてくださるのが富士山という存在じゃないかと。だから多様性の和だと。和というのは訓読みすれば日本ですけれども、大和ですね。本当に和というのをそこから引き出せる、そういう存在じゃないかと思います。

さて、深刻な話がございました。まず消防団、これは土肥だけでなくて、土肥の方面隊長として発言者５さんに御活躍いただいて、ありがとうございます。こういうたくましい

人がいると安心なんですが、今消防団員がどんどん減っていますが、私はしかし一方でふやすためにいろんな方策を講じているんです。税金を下げるとか、協力してくださる企業に対して、そういうこともしているんですが、やっぱりこれ男女共同参画ですよ。女性消防団員の数は圧倒的に少ないでしょう。それを消防団員は男だと思っているのが偏見だと思うんです。今はボクシングだってサッカーだって女性がやっているでしょう。野球もそうでしょう、ソフトボールもそう。ですから消防団は女性ができないと思うのは間違い。

むしろ東日本大震災のときに女性の視点というのがいかに大事か。避難所に避難したときにも、女性の目線で考えられていなかったことで、いろいろと不便を感じられたことがあったようです。ですから、女性の消防団員を加えていくということになりますと、それを積極的に進められると、ひょっとするとこの方面でも何らかの解決策が得られるかもしれない。むしろそういう資格を持っている人が出てくると、あるいはそういう技術を持っている人が出てきますと、これは安心でもありますので、ぜひそういうこともお考えいただきたいと思います。

それから農地が、いわゆる耕作放棄地が後継者不足等もありまして、静岡県全体で４年前は１万 2,000 ヘクタールありました。そのうちの 6,000 ヘクタールはもう草ぼうぼうといいますか、もう原野みたいになっちゃって、どうしても使えない。残り 6,000 ヘクタールのうち、可能なものが 2,000 ヘクタールぐらいできると。実は今年度、すなわち来年の３月までに 2,000 ヘクタールということを目標にしていたんですが、もう達成しました。必死で耕作放棄地を耕地にかえるという今真っ最中です。しかしそれもまた地域差がありますので、こちらでは十分ではないという面があるでしょう。

それから椎茸について、もう安全基準はクリアしていますね。ただ風評被害でまだ困っていると。きのうも実は椎茸の組合長さんとお話をする機会がありまして、また別の若い組合員、椎茸を栽培されている方ですが、夕刻また別途お目にかかって、今発言者５さんが言われたお話を聞きました。

それで私は組合長に福島、宮城、それから岩手ですか、そういうところで、特に福島県と宮城に椎茸の名人がたくさんいる。その人たちはもう仕事ができない。その人たちを自分たちが受け入れるから呼んで来てくれと言われたんですよ。そういうことを考えたことがなかったので、なるほどと。もっとも本当に来てくださるかどうかは別ですけれども、受け入れる用意がある。働き盛りですぐにそういう技術を持っている人を受け入れますよと言ってくださったので、それからもう一つは椎茸の我々は安全であることを数値でしっ

かり検査してますから、食べることです。それ以外に方法はありません。

まず風評被害は風評ですから、本当の数値はどうかというのは測ればわかるので、それをしてますので、お茶についても風評が出ましたけれども、全県下でチェックをして大丈夫だということで、徐々に戻って、今は戻ってきました。椎茸も同じようにしております。そしてそれは私たちが自分たちのコミュニティの方たちがつくったものをやはり旬のときいただくというようなことを通して、椎茸の生産者を励ましていく、これは一番だれもができることです。

もう一つはシカ、イノシシですね。このシカはもう今本当に困っているんです。どうしたらいいか。シカの食害があることは皆知っています。もう食害というよりも、ほとんど災害ですね、山が崩れていっていますから。ですからこれは止めなくちゃいけない。止める方法を教えてください。まず撃つといっても限りがあるし、そういう猟師の人も少なくなっているし、高齢化もしているし、どんどんふえていっているし、わなを仕掛けて、捕ってということになっているんですけれども、またシカ肉センターをつくってくださいました。しかし見に行かれたらわかりますけれども、これはもう焼け石に水のごときことです。しかもすぐに腐りますから、かといってそんなにたくさん処理できるだけの能力は持ってないのですよ。

そういうことでどういうふうにしたらいいかというので、私はもう自衛隊にやってほしいと言いに行ったんですよ。自衛隊に断わられたんです。それで今度は自衛隊のＯＢでいいから来てくれと、彼らは山野を跋渉してやっているわけでしょう。それもうまくいかない。

奈良にシカがたくさんいるでしょう。あれ京都に行ったとか、大阪に行ったとか言わないですね、あそこにいるんですよ。皆シカに餌をやっているでしょう。だからどこかに囲い込んで、そこのところを消防隊なり、あるいは伊豆市長さんも自衛隊出身ですから、その仲間たちであるところに囲い込んで、そこをシカの公園とは言わないまでも、そういうふうにできないのか。そうするとそこでしかるべくちゃんと検査をしながら、適切な数に保つための対策を講じていくというふうなことが、つまり追い込むということを言っているんですよ。追い込んだところを囲い込んで、そこをシカの生息地にするというふうなことができませんかね。だから私は本当に発言者２さんにも発言者５さんにも聞きたいんですけれども、発言者５さん、そうですね、３つぐらい方策を教えてください。

今猟師のことはだめです、だめというか既にやってますから。それから自衛隊もだめだ

った。それからわなを仕掛けてますけれども、あるいはまたシカ肉センターを設けてますけれども、これも限界があります。どうしたらいいですか。

＜発言者５＞

どうしたらいいかわからないから。（笑）

＜発言者５に対する知事のコメント＞

つまりみんながそうなんですよ。どうしたらいいかということで、多分シカの生態などについて詳しい人もいらっしゃるし、実際にどこかに追い込んで囲い込むというのが一番、群れで行動するでしょう。だから群れごと囲い込むというのが一番賢い。あれ群れですよね。

ちなみに人類がトナカイだとか牛だとか馬とか、こうしたものを家畜化したでしょう。あのときどうしたかというと１頭１頭やったんじゃないですよ。子供をかっさらってきたんです。子供をかっさらって、そしてあるところに、そうすると雌がやってきます。そのとき子供に対しては温かいから、そのときに一緒に乳を自分たちの人間のために搾ったんですね。要するに子供をかっさらって、そして雌を１カ所に集めて、そして雄は去勢をしたわけです。そうすると数がふえないでしょう。ですからそういうやり方をして、馬とか牛とかトナカイとか羊とか、これを群れごとコントロールしたんですね。

またシカについては、トナカイをロシアでやったことは聞いてますけれども、家畜化した。我々はちょっとそれを、オオカミを持ってこいと言う人いるでしょう。ちょっと怖いですよね。本気で言っているんですよ、皆さん。オオカミを持ってきて放せと言っているんです。だけどちょっとね。はい、わかりましたと、そう言えるような話じゃないので、もうちょっと自分たちの持っている知恵を働かすときがきたということで、私は群れごと囲い込む方法をやってみてはどうかと思っているんですが、まだうちの事務所の方も、あんな顔して難しい顔して、あれみんなすごい賢い人ばっかりですよ。

だけど、今知恵を出しあぐねている、方法を出しあぐねているというのは、発言者５さんと同じレベルなんです。ですからお互いに聞く人が、「発言者５さん、あなたどうしたらいいですか」と、向こうは向こうで「知事、どうしたらいいです」と。「どうしたらいいですか」と言い合ってこの４年たちました。もうちょっとやり方を変えるということで、いろんなことをやってみますけど、それがうまく功を奏しないかもしれませんが、私としては実は伊豆半島もそうですし、南アルプスの麓もそうですし、それから富士山の麓もそうです。実は全県下、かつ全国的レベルでこの問題は非常に深刻ですから、何とかしたい。

シカ肉は人間が食べられなくても、今最近ペットを飼っている人多いでしょう。皆さん、ペットを飼っておられる人は、スーパーマーケットとかそういうところに行かれると、驚くべき数のペット食品が売られていますね。私はシカなんていうのは最高のものになるんじゃないかと。乾燥させてペット用につくればいい。だからその用途も人間だけが食べるとなると限度があります。ですから今はそういう形でおいしく、またありがたくいただくような方法を知恵を出さないといけない。

正直に申し上げました。今私も困っているんですよ、この問題について。問題のあるのは知ってますけれども、解決策が出ていないというのが正直なところです。

＜傍聴者１＞

知事さん、きょうどちらでお帰りになりますか。修善寺の方に帰られますか。

＜知事＞

きょうは西伊豆に行きます。災害地へ。

＜傍聴者１＞

国道 136 号線の修善寺の方へ向けてお帰りにならないわけですね。あの道路が約 20 年ぐらいの悲願であったんですね。136 号線の改良工事です。これがずっと我々も努力をしてきたんですけれども、遅々として進みません。何とかしてこれを改良促進をしてほしい。わずか 1.5 キロぐらいの行程なんですけれども、それがちっとも進まないんですね。これを何とかひとつぜひ促進方をよろしくお願いしたいと同時に、もしわかっておられましたら進捗状況などもお願いしたいと思いますが、これ国道ですからね。でも県道に関係ないわけでもないですから、ぜひよろしくお願いしたいと思います。

＜沼津土木事務所長＞

沼津土木事務所の所長です。御意見ありがとうございます。今おっしゃったのは、そこの上がっていくところの？

＜傍聴者１＞

そうです。

＜沼津土木事務所長＞

今一生懸命改良しているんですが、バイパスは現道と高低差がありまして、部分部分で開通ができませんで、あと４，５年はかかりそうです。天城北道路を国交省さんが今開通を目指してやっていますが、その開通に遅れないように、こちらも供用できるように改良

を進めていく予定でございます。

現場を下から見ていただくとよくわかると思うんですけれども、現道と改良の高さがかなり違いまして、一定のところまで行かないとバイパスとして供用できないものですから、あと片押しでしか工事ができないものですから、あと４，５年かかってしまいますけれども、どうか御理解をいただきたいと思います。鋭意改良を進めておるんですが、工事を両方からとか、いろんなところで同時にできなくて、順にやっていかないといけないものですから、なかなか目に見えて進んでおりませんけれども、もうしばらくお待ちいただきたいと思います。

＜傍聴者１＞

ありがとうございました。いつも４，５年、４，５年とおっしゃいます。（笑）それはもう 15 年ぐらいたっているんですね。

＜知事＞

私今４，５年と聞きました。

＜傍聴者１＞

そうですね。いい人だ、ありがとうございます。よろしくお願いします。４，５年だよ、頼むね。

すみません、それからもう一ついいでしょうか。山川という川が流れております。今集中豪雨や何やら、いろいろと水害がございますですね。この我が土肥町は、やはりその山川をつくるときに、それなりの水量をのみ込むだけの体積で計算をしたと思います。今ごらんになっていただきたいんですけれども、あの河川に土砂が堆積をしまして、効力の３分の１ぐらいしかできないんじゃないかと私は思っておりますが、こういうときに知事さん、ぜひごらんになっていただいて、この川でいいのかどうなのかというふうなことをごらんになっていただきたいと思います。

＜沼津土木事務所長＞

山川につきましては、堆積している場所はときどき浚渫はしておるんですが。

＜傍聴者１＞

金山橋という橋がありますが、土肥中学校のそばですね。あれから河口までの、海岸に至るまでの状況ですね。

＜沼津土木事務所長＞

堆積したときは、数年に一遍は浚渫して、断面を確保するようにしております。今、土

肥中学校の前の護岸のかさ上げ工事をやっておりますので、御心配の向きはあろうかと思いますが、適切に管理をしておるつもりでございますが。

＜傍聴者１＞

わかりましたような、わからないような、やっぱりよく見ていってください。

＜沼津土木事務所長＞

定期的に川の状況は測量しております。

＜傍聴者１＞

どうもありがとうございました。

＜傍聴者２＞

皆さん、こんにちは。私は戸田から来ました。知事さんに対して、ややピントが違うお願いかと思います。それは戸田舟山にある火葬場のことです。この火葬場におきましては、昭和 39 年、その当時土肥町と戸田村一部組合協同でつくり、もう半世紀、50 年、現在まで引き継いだものです。平成の大合併により、土肥町は伊豆市、戸田村は沼津市へと合併し、離ればなれになった。戸田はもとより、土肥の一部の人たちは、今なお愛着を持って使用しております。

平成 21 年、沼津市行政は平成 23 年度末をもって廃止を決定づけましたが、戸田の住民の強い存続を求める要望に 27 年末まで延びたものです。西伊豆唯一のこの火葬場であり、廃止になれば、もう二度とこの地にできないものと思います。知事さんから平成 27 年以降も沼津市長に何かと存続をお願いいただきたいと思います。

もう一つ、土肥と戸田は主に海と観光にあります。漁船の燃料、自動車のガソリンの高騰で、観光客の減少が響いています。漁船の燃料と自動車のガソリンが１円でも５円でも安くなるように、国政に国民の声を届けてもらえるよう、知事さんにお願いをしたいと思います。以上です。

＜傍聴者２に対する知事のコメント＞

舟山の火葬場のことは知りませんでした。そういう歴史的な経緯があって、結果的に合併で、一方が沼津、他方が伊豆市というふうになって、しかしこれはもう先祖代々、そこで御一緒に一体的に持っていたところで、これ私が今すぐにはいわかりましたと言うわけにはいかないと思いますけれども、今その問題があることがわかりましたので、どういう

ふうにしたらいいか、ちょっと預からせてください。申しわけありません。

それから円安でどうしてもガソリン代が高くなっているというのは、これなかなか私の方でどうしようもできない面もあります。日本全体の経済の問題ですので。しかしガソリン代も大きくは、例えばシェールガスという新しいガスをアメリカが供給するようになって、ガソリン代が下がる可能性もあります。それからもしイランに平和がくれば、あそこのイランは今輸出していませんが、ものすごい石油の量、それが出てきますと石油の値段が下がります。

ですから円安になって輸入価格が高くなっているんですけれども、別の要因でまた価格が下がる可能性もありますが、残念ながらこれはなかなか政府、あるいは経済界、あるいは地方の行政、その力でもってその価格を左右することができないような性質のものであるということは、どこかで御理解いただきたい。

ただし今そういうふうに観光と海ということでありますので、そもそも津々浦々ですよね。もともと津というのは港です。港を浦、海、それから船で結んでいたというのがこの伊豆半島、あるいは日本全体の姿だったと思うんですよ。ですからもう１回、自動車の社会ではありますけれども、県道 223 号というのができて、実はこの 223 号でフェリーが走って、ある人がこちらの伊豆半島の木材を今までトラックで運んでいたんですけれども、フェリーの中に運び込んで、そのまますっと清水港で揚げて、しかるべきところに持っていくと、輸送費が２分の１ぐらいになったということで、やっぱり我々は長い間、物を運ぶのに、今はトラックで運んでいます。重量と価格ベースで 95％がトラックです。

かつては日本は船で運んでいたんですね。ですから船というものを静岡県はこれだけ 505 キロの海岸線があるし、港があるので、これを上手に活用しながら、観光にも、また経済にも生かしていくという、それが広まりますと、船を操っておられる漁業の方や何かだけの問題ではなくて、すべての人たちの問題として、ガソリン価格が高騰して、大変漁業の方が困られている、あるいは観光業者の人が困られているということが、もっと強く意識される可能性がありますね。ですから自動車だけではなくて船の活用なども考えてみてはどうかというふうに、今のところは別に具体的な計画があるわけではありませんけれども、そういう考えを持っております。

＜傍聴者３＞

私は土肥の小下田というところに住んでいます。そこは先ほどの発言者５さんと同じ集

落で小峰という集落です。恋人岬のすぐ近くなんですよ。

そのときに平成22年だったと思いますけれども、県知事さんの声がかりというのか、そういうので１社１村運動というのがありまして、沼津の企業と縁組みをさせていただいて、とてもいい思いをさせていただいているというか、恋人岬の下に白枇杷園というのがありますけれども、そこの草刈りをしていただくということで、沼津の企業さんが入っていただきました。

そこの方たちが草刈りの後というか、食事の後で休むのに小峰の公民館を貸してもらえないかと。それで縁組みができたわけですけれども、そしたらそのときに恋人岬で私たちの野菜とか、そういう農産物を販売してもらえるようにしないかということで、旅館組合さんの方にいろいろお話をしていただいて、それをさせていただいていますけれども、そしたら旅館組合さんの方で、年に何回かイベントがあるわけです。

12 月のクリスマス、それから２月のバレンタインデー、３月のホワイトデーですけれども、そのときに今までは組合さんの方で、豚汁とかをつくって、いらっしゃるお客様に食べてもらっていたわけですけれども、それを私たちがつくって、そしてみんなに振る舞ってもらえないかということで、じゃ私たちも自分たちのものを売ってもらっているので、ぜひ協力しようということで、みんなで協力するようになりました。

そこですばらしい出会いをいっぱいさせていただいて、私たちの集落は本当に限界集落で、お年寄りが半分以上、60 歳以上が半分以上どころじゃないと思います。その人たちがつくるわけですけれども、恋人岬に行くと、本当の赤ちゃんから若いカップルから、若い人たちとふれあいができるわけです。そこでいろいろなふれあいがあって、本当に楽しい思いをさせていただいて、みんな感謝してます。ありがとうございます。きょうはそのお礼を言いたくて伺いました。ありがとうございます。

＜傍聴者３に対する知事のコメント＞

最後にいいお話をいただきましてありがとうございました。恋人岬は鐘を鳴らすところが２つありますよね。あれは「３回鳴らす」と書いてあるんですね、３回。３回以上鳴らすと御利益がないそうです。皆、キンコンカンコン、キンコンカンコンと鳴らしますから。

あそこは突端のところに行けば、海と富士山が全部見えて、「わだつみの鐘きららかに吹き渡り恋人岬の鐘の音」という美しい歌がありますけれども、そういうところなので、い

わばパワースポットですね。パワースポットとして静岡県も宣伝しています。白枇杷というのは土肥の名産でもあるし、それを何かいろいろと美肌というんですか、石けんだとか何かに使っていらっしゃる人もたしかいらっしゃいますね。きのうそのご婦人にお目にかかりました。そういう方もいらして、燃えているなという感じです。さすが恋人岬。

あそこはハイヒールでも行けるでしょう。ああいう普通だと大変なところを本当きれいに整備されたのは、非常に賢いというふうに思っております。そしてそれが一社一村で沼津の企業と、彼らは企業の社会的責任ということもあって、自然を社員がそこに行ってよくすることが、実は彼らにとってリフレッシュになるんですね。同時に人に喜んでいただいて、また地元の料理も楽しめるということで、それを旅館組合の人たちと御一緒になさるのは、これが新しい結合で、こうしたことをモデルとして、もっとほかの人たちも真似ていただくようにするのがいいと。

恋人岬ですから、もちろん老齢のカップルもさることながら、若いカップルがそこに行くように、我々は仕向けております。私もまずはみずから率先ということで、古くからの恋人、私のボスですけれども、一緒にそこに行って、間違ってキンコンカンコン、キンコンカンコンとやったので、なかなか。非常にいい、天気のいいときにはすばらしいし、皆様も恋人岬にはぜひ行ってください。

多くの人がそこに行って口コミで広がるというふうにしていくことが大事じゃないかと。やっぱり口コミで皆さんが自分の感性で感じたことを言っていくことが力になっていくということで、一人一人の出会いを大事にして、その人がいい思い出を持って帰るようにしたいものですね。ありがとうございました。

申しわけありません。実は西伊豆の方の災害現場に行くのと、それから帰りの土肥港からのフェリーがございますものですから、きょうはちょっと時間が延長できないので、後からまたちょっとお話を承ります。どうも皆様方２時間、長い間でございましたけれども、広聴会に御出席賜りまして本当にありがとうございました。